

中高年者の老人クラブに対する意識の特徴

ー岩手県A市における調査からー

○ 岩手県立大学 菅野 道生 (7425)

キーワード3つ：老人クラブ 高齢者 社会参加

1. 研究目的

本研究は、中高年の住民を対象とした調査データの分析を通じ、「住民ニーズにこたえる老人クラブ」像をモデル的に描き出すことを目的として実施した。

老人クラブ活動については、その活動実態や課題について明らかにしようとする研究がすでに数多く取り組まれてきている。古くは1950年代後半から60年代はじめには高度成長を背景として都市部を中心に老人クラブ活動の在り方が盛んに論じられた時期があった。

この時期すでに「老人クラブの新段階をめざして」(矢内1957)や、「行き詰った老人クラブ」(磯村1965)など、旧来の老人クラブの在り方を反省し、新しい活動スタイルの方向性について議論されていた。近年では、高齢化の進展のなかで高齢者の社会参加が課題となるなかで再び老人クラブ活動にスポットライトが当てられるようになっている。特に2000年の介護保険施行以降は、介護予防活動との関係で老人クラブ活動の役割に言及する研究が急増している状況にある。これらの先行研究の多くは、基本的に老人クラブ役員や会員を対象として収集したデータに基づく研究となっている。しかし、活動に参加が見込まれる若い世代、あるいは対象年齢であるにも関わらず老人クラブ活動に参加しない高齢者を対象にそのニーズを分析することなしに、今後の活動の方向性は見えてこない。

上記の問題意識を踏まえ、本研究では50歳から74歳の住民を対象に老人クラブのイメージや住民の老人クラブへの参加意向の特徴について量的データの分析を通じて明らかにすることを試みた。

2. 研究の視点および方法

本研究の基本視点は、老人クラブのイメージや加入意向、関心のある活動内容等の特徴について、現時点での加入・未加入別、年齢階層別に分析し、住民のニーズにこたえる老人クラブ活動のあり方について検討することにある。

上記の視点に基づいて、岩手県立大学とA市役所、A市老人クラブ連合会が協働で地域住民に対するアンケート調査を実施し、そこで得られたデータを分析対象とした。

調査対象者は、岩手県A市に居住する、(基準日平成28年4月2日)50歳から74歳の男女2,000人の住民である。住民基本台帳から上記の年齢を基準に無作為抽出によって抽出し、調査対象者リストを作成した。調査方法は郵送法による自記式アンケート調査である。調査の実施時期は、2016年12月～2017年1月である。調査票の有効回収数は991票、最

終的な有効回収率は49.6%である。

3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し、研究上の倫理的配慮を講じている。調査の実施にあたっては、調査依頼書面において回答結果はすべて統計的に処理され、個人の情報は現に守られること、また結果は本研究以外に使われることはないこと等について明記し、調査への回答をもって同意を得たものとした。

4. 研究結果

まず老人クラブへの加入有無に関しては、「60歳以上だが、加入していない」が58.7%と最も多く、「まだ、加入年齢（60歳以上）に達していない」が34.7%、「加入している」が6.2%という結果であった。「加入年齢に達していない」や「加入していない」と回答した人に対し、老人クラブやその活動について知っているかどうかを質問したところ、「老人クラブの存在は知っているが、活動内容については知らない」が52.8%、「老人クラブの存在も活動内容も知っている」が23.5%、「老人クラブの存在も活動内容も知らない」が14.2%という結果であった。老人クラブへの加入意欲については、「わからない」が49.4%、「加入しようと思わない」が32.7%、「加入しようと思っている」が11.4%の順となっており、加入意欲のある人が1割に留まった。最も多かったのは「人間関係がわずらわしいから」の17.6%。次いで、「家事や仕事で忙しい」が12.2%、「活動内容がわからないから」が11.9%、「他のサークルや同好会で十分だから」が7.3%という順になった。

また、どのような条件があれば加入しようと思うかについて質問したところ、「活動内容に魅力があれば」が24.5%と最も多く、「時間的な余裕があれば」が17.2%、「健康上の問題がなければ」が10.8%、「友人や知人といっしょであれば」が7.9%という順となった。

また、老人クラブのイメージについては、未加入で年齢の若い人ほどイメージが悪く、未加入で年齢の高い人、老人クラブ加入者ほど良いイメージを持っている事なども明らかとなった。関心のある活動では加入者・未加入者ともに「ウォーキング」が共通して高いポイントを示した。また自分や家族が介護状態になることへの不安も共通して高くなっていた。

5. 考察

調査結果からは、老人クラブ活動のキーワードとして「健康づくり」や「ウォーキング」を前面にだすことが、未加入の住民のニーズにこたえるために効果的であることが示唆され、こうした住民のニーズを踏まえた老人クラブ活動の展開を考えていくことが必要といえる。

本調査は平成28年度 岩手県立大学地域政策研究センター・地域協働研究（地域提案型・前期）の研究成果の一部である。